
 著者捺印

昭和二十一年九月一日印刷
 昭和二十一年九月十日發行

春の歌
 定價拾圓

著者 村岡花子
 發行者 東京神田區小川町一ノ十一 岩本幸男
 印刷者 東京神田區小川町一ノ十一 愛光堂印刷製本株式會社
 代表者 岩本米次郎
 配給元 東京神田區板橋町二ノ九 日本出版配給株式會社

發行所 東京神田區小川町一ノ十一 愛育社
 電話神田 〇七六二四六番
 振替口座東京 二八〇二番

令女小説
 春の歌
 村岡花子著


 愛育社刊

はじめの言葉

戦争の中で烈しい労働と苦しい犠牲に堪へて来た若い女性のみなさんに、この一篇の物語をささげます。

民主主義の國アメリカで成長した女主人公が語り、また行ふことの中に自由といふことの正しい意義をつかんでいただきたいのです。

西洋の美しさと、日本の温かさとを、しつかりと身につけていただきたいと念じつつ、愛する読者のみなさんたちに御挨拶を送ります。

昭和二十一年秋

村岡花子

「つまりね、吉田は、僕と別れてアメリカに踏みとどまつてから大成功をしたんだね。無論結婚もし、女の子が一人出来たんだ。それが今年二十歳になるんださうだが、運のわるいことには、三年前に母親が死んだので、その娘は寄宿舎へ入れてあつたらしいんだ。この二十歳の娘が吉田の跡取りなんだから、莫大な財産の持主になるといふわけなんだ。吉田は僕に遺言状を書いて、娘のために親代りになり、後見の役を務めて呉れと言ふんだ。むかふの辯護士から、正式の通知を受取つたんだが、僕は、あなたも知つての通り、非常に忙しいし、それに始終旅行がらなので、とても若い娘の監督なんかしてはゐられない。家内は知つての通りの病身だから、家にゐての相談相手ぐらゐなら出来るけれど、とても、アメリカ歸りのお轉婆娘の出入りを、氣を附けるなんてことは出来ないんだ。」

「左様でございますとも。社長御夫婦にそんな御用をおさせするといふのは、いくら御親友でも、あんまり重のよすぎる注文でございますよ。それに、日本で生れて日本





たんですけど——實は支度までしたんですよ。ですけど、急にお暑くなったため
せうか、いざ、出かけようつていふ時に、めまひがしましてね……たうとう、寝か
されてしまいましたのよ。ごめんさいね。」

静枝は嬉しさにわくわくする胸をおさへるやうにして、

「小母さま。はじめまして、けさは御気分よろしいんですか？ ああ、さう。ようご
さいましたわ。あの、小母さま、綺麗なお花、ありがたうございました。きのふ着さ
ましたら、綺麗に飾つてございましたの。ありがたうございました。」

きのふ、静枝が着いたこの家で、居間へはいると、美しい花籠に、

祖國の土の上の最初の眠り、まどかなれとこそ祈ります。これから仲よくして
下さいね。

うさばしいベンの走りがきいて、このカードがついて、匂つてゐた。

久美子

來訪者

波岡夫人が何か言ひかけたところへ、女中が名刺を小さいお籠にのせて、美しいお
問者を知らせて来た。夫人はそれを手に取つて、

「ああ、高木さんね、こちらへお越ししてらうだ。お言葉ですが、氣の置ける
方ではありませんからと申上げてね。」

女中が出て行くと、静枝に向つて、

「高木といふ若い人ですが、茂雄さんなんかとは人種がちがつてゐるかと思ふやうな
無骨者よ。まあ、逢つてごらんさい。日本にもいろいろの型の青年がゐますよ。」

女中に案内されてはいつて来たのは、今しがた波岡夫人から「青年」と言はれたか
らこそ、若い人だと承知が出来るだけで、唯見たところでは、年取つてゐるのか、青



と呼びかけた静枝の聲にはどこか凛然とした響がこもつてゐた。
 『佐藤さん、お願ひですから、お嬢さんなつてあつしやらないで下さい。わたくし、そんなやうに呼ばれるわけがないんですもの。みなさん方三人にくらべて、わたくしが一ばんのもの知らずです。みなさんたちのお邪魔にならないやうにするだけで、一杯なんですよ。ですから、どうぞかういふ不器用な助手を、御迷惑がらずに、何でも教へて下さいませね。わたくし、このお仕事を見ておればおるほど、みなさん方の御苦勞は、とても一通りのものぢやないと思ひますの。でも、子供たちの喜びかたを見ておると、どんなに苦勞してもいいと思ひますね』

佐藤よし子は頷いて、
 『さうですよ。高木先生は、あの子供たちの嬉しさうな顔に引かれて、大學を卒業なすつてから今まで、あおして苦勞していらつしやるんですものね。あたしたちは唯、毎日の仕事をやつてさへおればいいんですけど、高木先生は、お金をこしらへる



『ええ、お部屋です。ちよつとお待ち下さい』
 無難作に家の中へはいらうとするのを軽くさへぎつて、静枝は、玄關の呼鈴を押し、女中が出て來ると、
 『山口さんのお部屋へ御案内して上げてちやうだい』
 くりくりと丸い眼をして、フランス人形のやうな顔をした佐藤よし子は、静枝の様子をぢつと眺めてゐたが、内心では、
 『何て固苦しいことをするんだらう。山口さんは御自分のお母さんのところへ行かうとしてらつしやるんだもの。どんどん入れて上げたつていいのに』
 と、ちよつと静枝の動作に反感を持つたが、静枝はそんなことには少しも氣附かず玄關のあたりを片附けに出て來た女中に、
 『あのね、山口さんに、あたしたちは一足お先にまゐりますつて言つてちやうだい』
 と言ひつけた。



「佐藤先生、あたしたち、歩きながらのあはなし會をしてゐるんですよ。五郎ちゃんともみつらちゃんとテル子ちゃんと次郎ちゃんがあはなしをしたところですよ、これから、三ちゃんの番なのです。先生も仲間にはいつて下さいませんか？」

「先生、佐藤先生、来て下さい」

「佐藤先生、一緒に行きませう」

これから話す番に當つてゐる三ちゃんは、一番熱心に、よし子の手にぶらさがつた。

「先生、ボクの代りに、あはなしして下さい。ボク、あはなし出来ないから困るんだもの」

「おやおや、三ちゃん、それぢや駄目よ。自分の番にあつたら、ちゃんと、やらなけりやいけないわ。ね、いつでも言つてでせう、あはなししなけりやならない時は、ぐづぐづしないで、大きな聲で、ちゃんと言ひませうつてね」

よし子はもうすつかり、「先生」の氣分を取り戻してゐた。



ゆらぐ命の灯

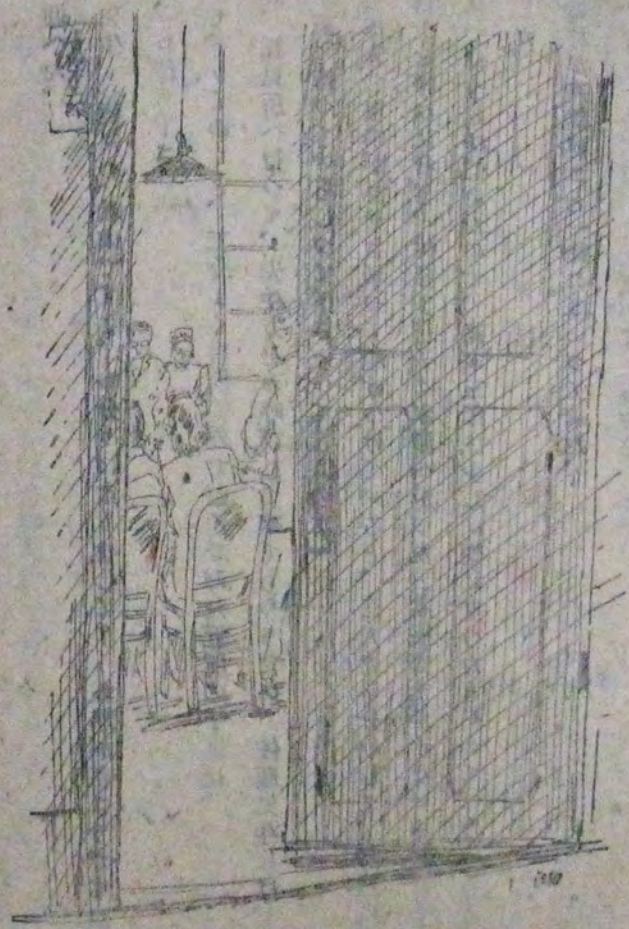
高木三郎は、片腕ぬぎかけてゐた國民服に又手をとほして、ものをも言はず、稲田よりも先に部屋を飛び出した。

もう電車もとほつてゐなかつた。たつた二停留場ほどの、この道のりが、二人には、どんなに遠く思はれたことだらう。

とある横町を、また曲つた露路の突きあたりの家の前まで來ると、稲田は、高木三郎の顔をのぞき込むやうにして、

「先生、大丈夫でせうか、虎吉は、死ぬんぢやないでせうか？」

「はかなことを言つてないで、さ、早く、虎坊のところへ僕を連れていつてくれたまへ」



高木三郎は眼をあけてだまつて博士の顔を見た。丁寧に診察を終へると博士は、保母たちの方を向いて、

「徹底的にひやして下さい。御苦勞でも、今夜は交替で起きてゐて看病して下さい。さうくらの覺悟でね……」

高木三郎は寢息を立ててゐた。吉田静枝が聲を忍んで、

「先生、入院をおさせしないでいいでせうか」
と訊ねた。

「その入院ですがね、今、下手に動かすと、それつきりまわつちまふ恐れがあるんです。何しろ、けふ一日あの容體で苦しみどほしたんですからね。絶対安静に置いて、ここで手當するんです。急性肺炎の最も悪性なのを起してゐるんです。あなた方は托見所があるんだから、あんまり無理は出来ません。と言つたところで、あなた方のことだ、ちつとしてはゐられないでせうけれど、まあ、交替で起きていただ